

**ご意見・ご質問コーナーに寄せられたご意見ご質問
(期間：平成25年2月28日～平成25年3月13日)**

提言

○年 齢 : 66歳～70歳

○性 別 : 男性

○職 業 : 無職

○都道府県名 : 大阪府

○ご意見の内容:

原子力発電の安全性を確保するために

少なくとも日本国内の全電力会社は事故に対する事業者間相互保険に強制的に加入させるべきである。なぜならば、電力などの公共性の高い事業においては、国営に限りなく近い民間企業であることが望ましいものとする。即ち、原子力発電事故に関しては、一電力会社で処理できる範囲を超えている。更に、電気事業者は運命共同体とすべきである。

送発電分離による競合化もさることながら、事業に責任をもつことを指導することが行政である。具体的には、関西電力が原発の再稼働を熱望していますが、原子力発電の有効性・必要性とともに、電力事業者としての対策(相互保険)等の心構えについて原子力委員会として指導が必要である。

私見ながら、原子力発電設備の発電効率を優先して大型の炉が制作されている、これを原潜の炉規模にして、多数の炉で構成し、循環型の運転サイクルにすれば、点検などによる電力の低下を発生させることなく、又廃炉についても処理も容易になると同時に事故が発生したとしても小さく抑えることが出来るものとする、初期費用はアップするでしょうが、マンネリ脱出が必要だと思いますが。

福島第一原発事故の原因究明

○年 齢 : 66歳～70歳

○性 別 : 男性

○職 業 : その他

○都道府県名: 鹿児島県

○ご意見の内容:

安倍総理がいわれた福島第一の事故の原因究明(福島第二、女川は事故なし)はどうなったのでしょうか?。私はこの事故は完全に人災だと思っているものです。理由は全電源喪失時の最後の砦である非常用復水器の操作が全く行われた形跡がないからです。それが2号機(77時間後)、3号機(42時間後)もメルトダウンに至った最大の原因だと考えています。この2機は2～3日はバッテリーで復水器が動いていたはずで、バッテリーが切れると同時にメルトダウンに至ったと思われます。全電源喪失したはずの福島第二、女川がどう対応したかを調査し福島第一との違いを明確にすべきです。福島第一は所長以下全員が非常用復水器の操作を認識していなかったとしかいいようがありません。完全な人災です。ここを明確にして対策に加えない限り事故の再発防止にはなりませんし再稼働もできないはずで、いくら安全対策をしても完全はありません。万が一の時の唯一のそして最後の冷却手段なはずで、この原因究明はそんなに時間のかかる内容ではないはずで、総理の言葉を裏切らないでください。

原発の再開

○年 齢 : 76歳～80歳

○性 別 : 男性

○職 業 : その他

○都道府県名:大阪府

○ご意見の内容:

政府は再開の判定基準に原子力委員会の安全判定としておりますが、その基準を国民にお示し願いたい。小生は福島原発で廃炉へのすべての道筋が出来上がり、冷却水の廃液の解決ができたときに初めて、再稼働に入ることになると思います。大飯の再稼働継続は認められない。需要期を過ぎたのですから。

安い電気と関電は言いますが、多量に冷却水、使用済み核燃料が累積されていく現状から、その処理も決まらず、莫大な費用が待ち受けている。止めるべきだし、政府がやれないのであれば、どうするか国民投票すべきです。電気の発送電分離を明確に決め、代替エネへ官民あげ、景気浮上につなげるべし。そのための国民負担は許される。とにかく向う10年はこのために生活を犠牲にして世界に範たる挑戦をすべきです。

核のゴミは月に送り込むのは乱暴な考えですか。国際レベルで考えることはできませんか。お金では解決できない地球規模の生きるか死ぬかのテ-マですから。国連の中にそうしたプロジェクトを提案してほしい。

極端に過剰な注水量が大量の汚染水を生んだ(1)

○年 齢 : 56歳～60歳

○性 別 : 男性

○職 業 : 無職

○都道府県名 : 滋賀県

○ご意見の内容:

福島第一原発事故に関する東電のロードマップ資料によると、2013年2・3月の崩壊熱は、1号機が0.2MW(200kJ/s)、2・3号機が各0.3MW(300kJ/s)まで下がった。これを冷却するのに必要な水の量は、水の気化熱が約2.5kJ/gであるから、1号機で80g/s(0.29t/h)、2・3号機で120g/s(0.43t/h)と概算できる。一方、事故後2年経った今も、注水量は毎時4.5tないし5.5tであり、必要量の10倍以上の過剰な量となっている。発生する汚染水は、これに地下水の混入分が加わるので、さらに多くなると思われる。

原子炉格納容器は、ガス管理システムにより、窒素ガスの注入と水蒸気の排出が行われており、格納容器内の水蒸気が飽和することがないので、底部に溜まった水が蒸発し、気化熱で冷却している。この水蒸気が2号機格納容器上部の壁で結露し、豪雨のように降っている様子が2012年1月の内視鏡調査で撮影された。これは定常的な状態だと考えられるから、降るのと同じ量の水が蒸発していることになり、必要な冷却がなされていると思われる。

極端に過剰な注水量が大量の汚染水を生んだ(2)

○年 齢 : 56歳～60歳

○性 別 : 男性

○職 業 : 無職

○都道府県名 : 滋賀県

○ご意見の内容:

過剰な注水により、ほとんどの水は蒸発せずタービン建屋の地下などに流出していると考えられる。水の比熱は気化熱に比べると非常に小さいので、これらはあまり役に立っておらず、いたずらに汚染水の量を増やしているだけである。注水量と移送水量を今の1割程度に下げるべきである。

汚染水のセシウムは除去されているが、ストロンチウム 90を含む汚染水の仮貯蔵タンクは増え続けている。ストロンチウムはアルカリ土類元素であり、弱アルカリ性の水には難溶であるはずである。炭酸カルシウムのペレットを原子炉格納容器に投入すれば、pH および炭酸濃度を緩衝して、ストロンチウムの溶解度を大幅に低減させることができると思われる。

汚染水の量と放射能濃度をできるだけ下げる工夫をすべきである。東電と国は、いまだにパニック状態が続いているのか、あるいは「冷温停止」という言葉に縛られているのか、冷静な判断ができなくなっていると思われる。そのために仮貯蔵タンクから汚染水が流出するリスクが高まってしまった。